職場紹介シリーズ①

かきぜサポートセンター「寄り合いセンターいずみ」

小規模多機能型居宅介護「寄り合いセンターいずみ」は2011年7月1日に開設しました。小規模多機能型居宅介護とは、介護が必要になっても住み慣れた自宅や地域で暮らしたいという思いや願いを実現する為の地域密着型サービスです。

「通い」を中心としたサービスで「訪問」「宿泊」等のサービスも提供しています。「通い」を通じて馴染みの人間関係を構築しながら「宿泊」「訪問」のサービスを提供するため、環境の変化によるダメージが少なく、特に認知症高齢者の混乱や不安を軽減することにつながっています。「通い」の利用時間の幅が広く、朝食からの提供や夕食後の帰宅も可能で、それぞれのニーズに合わせてご利用していただいております。

高齢者の暮らしを共に考え、「介護する」「介護される」の関係ではなく、共に生きることを支援する協力者として、一人ひとりの生活を継続的に支えることができるよう、地域に密着した事業所を目指しています。

スタッフのうち出勤者です

職場紹介シリーズ②

「リハビリセンターいずみ」

リハビリセンターいずみは、診療所「クリニックいずみ」に併設された医療事業として、2004年にスタートした20名規模の介護保険指定通所リハビリテーションです。

介護保険認定をお持ちで、障がいや機能低下による生活上の不安を抱える方に対し、徹底した専門職の個別的な関わりを行っています。しかも、リスク管理とさらなる仕組みの改善を求め、国際標準化機構ISO9001の認証登録を行い、客観的な視点で効果を導けるようにしています。

スタッフは充実した対応が図れるよう、作業療法士や看護師、介護福祉士等の専門職のみで構成され、様々な疾患・状態に対し、より専門的で、クオリティの高いサービスが出来るようにしています。

私達は信頼と確実性をコンセプトとし、地域における障がい者・高齢者のためのリハビリ挑戦者として、ご利用される方々お一人おひとりに対し、最高の結果が出せるように努めます。

スタッフ全員です

研修報告

「自宅で暮らす要介護高齢者を専門職と住民で支え合う地域共同介護の実際を学ぶ」報告会に参加して。

介護保険サービスセンター
主任　東　久美

3月13日神戸学院大学で開催された厚生労働省老人保健増進等事業の一環でもある地域包括ケアマネジメントの実践報告会にパネラーとして参加する機会を得ました。

今回のきっかけは厚生労働省からの委託をうけたCLC（コミュニティライフサポートセンター）からの依頼で、介護サービスのみでなく、近隣、地域やボランティアグループ沖代すずめの家など多様な主体が協働して「住み慣れた地域で、その人らしく、最期まで暮らし続ける」ためのケアマネジメントについてまとめ、媒体としてDVD、ガイドブックを作成し、全国的に普及、促進活動をおこなうことへの協力要請でした。

神戸では在宅ケアマネージメントの実践報告の中で先駆的な実践事例として、いずみの園として連携するに至った経緯やポイント、留意点など明らかにし、「生活支援サービス」の提供について触れました。

今回の事例対象者は認知症著明な独居高齢者の方でしたが、本人の意思を尊重し地域の住民や有償サービス、介護サービス、医療、他大勢の方の温かい支援の中で、最期まで念願であった自宅で過ごすことができました。支援の過程においては、遠く離れた家族、地域住民の参加もお願いし、話し合いを繰り返し、情報の共有と支援の統一が図れた成果だと思います。重要なことは、本人の意思を尊重し、お互いの役割や存在の大切さを認め合い、そこから住民参加型の多職種共同介護が実現できるのではないかと思います。

私たちケアマネジャーの使命として、今後更に地域・多職種との連携のためのネットワーク作り、地域包括ケアマネジメントを行っていきたいと思います。

お問い合わせ・ご相談は

園内研修会より

2011年2月開催

「24時間・365日ケアコールが支える夜間の安全と安心」

訪問介護課　課長　山本さつき

夜間対応型訪問介護〈24時間365日〉

介護サービスであるこの事業を開始して、一年が経過しました。いずみの園コールセンターは、「住み慣れた我が家で、地域で、生涯暮らしたい」と希望する、要介護1～5までの要介護者の方へ、24時間365日在宅での安心・安全をお届けします。ご利用者やご家族の皆様からは、夜間の不安の解消や、転倒・転落時に安心と言うお声を多く頂いております。その中の1例ですが、認知症状のある夫を介護している奥様から、緊急コールがあり「不穏行動があり夜間外に出かけようとしているので助けて下さい」とSOSコールがあります。コールがあり平均時間約20分程度で、ご利用者宅へヘルパーが訪問し、ご本人のお話を聞きながら現状把握を行い、ニーズに添ったケアの支援をします。1回の訪問はおおむね30分ですが1時間位利用になっても料金は同じです。

＊

〈厚生労働省モデル事業の実施〉

2010年度24時間巡回型訪問介護モデル事業は全国で8ヶ所のみ指定を頂き、2011年2月3月の2ヶ月実施しました。2012年度から訪問介護の新しいサービスと言われ、ご利用者の日常生活の向上と在宅生活の継続を目的に、短時間（20分程度）の訪問を巡回することで、食事や排泄、更衣、安否確認の支援を行い、「我が家で暮らしたい」という思いを可能にするケアです。今年度の1年間このモデル事業を継続できることとなりましたので、訪問介護員83名で頑張って訪問活動行っています。2012年度介護保険改定では地域包括ケアシステム構築の為各機関との連携を図り、高齢者や障がいのある方の尊厳と生命・日常生活を24時間365日見守りながら、安心と安全の支援を行って参りますので今後も多くの方にご利用頂きたいと思います。

「玄米粥・玄米ご飯による自然排便の取り組み」

看護課　主任　河野和樹／栄養課　主任　久留見綾野

「アメニティーの本質を目指して」玄米食による自然排便の効果について発表させて頂きました。

排泄とは人間が本来持つ生理的な機能で、生活の快適性の重要な核となります。いずみの園では、高齢化や重度化により消化吸収機能低下や機能不全による排便困難者が増え、それに伴い下剤服用者が増加、下剤服用時の不快感の訴えも多くなりました。そこでこの問題を打破する為に、2010年2月から1年間「玄米食」による自然排便への取り組みを実施することにしました。その結果、対象者34名中、50％以上の入所者に効果があり、継続することへの妥当性が得られました。

今回の成果をふまえ、今年度はプロジェクト化を図り、定期下剤服用者の半減を目指します。今後も入所者の自然排便を可能にし、更なるQOL・日常生活のケアの向上を目指します。

全国個室ユニット型施設推進協議会

九州ブロック地域ネットワーク研修会報告

3月12日（土）、13日（日）の両日、中津市のホテルを会場に沖縄を含む九州各地から40名の会員が集まり、個室ユニットのケアの未来について研修が行われました。

当初、足立前厚生労働大臣政務官の講演も予定していましたが、前日の東日本大震災の発生により東京を離れることが出来ず、急遽、予定を変更せざるを得ませんでした。

研修会は全員で犠牲になった人への黙祷のあと、同協議会副会長の野邊正涼氏（宮崎県・〔社福〕黒潮会理事長）の開会の挨拶に続き、諸隈正剛副会長（佐賀県・〔社福〕天寿会理事長）の基調報告があり、主催者で協議会大分支部長の当法人冨永常務理事の「これからの高齢者福祉を考える」と、当園岩崎・熊井両部長のユニットケアと24時間在宅ケアの取り組みについての「いずみの園報告」を行い第一日目を終えました。翌日はいずみの園のユニット型特別養護老人ホームやかきぜサポートセンター小規模多機能居宅介護施設を見学し、研修を終えました。

参加された皆さんは地震の影響で交通機関が混乱し、日程の変更を余儀なくされましたが、それぞれの施設で一層のケアの充実に奮闘する想いを新たにし、研修会を終了した次第です。

「ボランティア交流会から震災に思う事」

研修課　課長　森　光徳

3月10日に第16回ボランティア交流会が開催され76人もの参加者があり、職員とボランティアの方々と良い親睦の場が持たれました。講演では児童養護施設栄光園の江口施設長より児童養護施設の歴史や現在における問題点など、そこに参加された方々が大いに感銘を受けられる講演でした。日本で最初のボランティアは、723年に聖徳太子が行った悲田院であるといわれています。いずみの園では、年間を通じて5000人以上の方が各部署においてご奉仕下さっています。

ボランティアとは、決して特別な人ではありません、お互いの生活の中で出来る事を、自発的に自分の能力とお金と知恵と時間を使い隣人のために、隣人と共にサービスを表すことです。日本は、高度経済成長時に経済は豊かになりましたが大切な心を忘れ去ってしまいました。「隣は何をする人ぞ」と言う風潮が広がってしまいました。

3月11日に東日本に大震災が起こり嘗てない甚大な被害と多くの被災者を出しました。そこで、各国のメディアが報じたニュースでは日本人の忍耐と尊厳ある態度に世界は驚嘆し賞賛の記事を掲載しました、日本は、昔から自然災害に幾度となく打ちのめされて来た歴史があります。しかし、この島国で生きていかなければなりません。そんな中から自然への畏敬の念とお互い共助するコミュニティ精神が生まれてきました。図らずも、この大災害の中で他者と重荷を分かち合うコミュニティ精神が日本人のDNAに脈々と受け継がれて来ていた事が証明された状況でもありました。日本人はボランティアの素質は、充分備わっていますが、それを発揮する場や方法がわからない人が沢山居られます。どんな些細な事でもボランティアは出来ます。地域において独居の方の見守り、声かけ、買い物、送迎ボランティアなど、まず自己の身の回りから隣人へ声をかけてみてはどうでしょうか。施設において、ボランティアをしてみたい方は是非いずみの園の研修課までご一報下さいませ。

栄光園ファミリークラブ発足（EFC）

当法人の理事長と常務理事が理事長と理事を兼ねる社会福祉法人栄光園（児童養護施設などを経営・別府市南荘園町）の卒園する子どもに対し、いずみの園では有志の職員に呼びかけ、毎月1口（コーヒー1杯分）以上の会員を募り、基金をつくるため、栄光園ファミリークラブ（略称:EFC）を結成しました。児童養護施設をめぐる課題は種々ありますが、大きな課題は社会に巣立つにあたって資金がないということです。

こうしたことへの支援として、今後、栄光園の子どもが社会で自立するため、看護や介護など資格を取るための専修学校や大学等への進学の育英資金として毎年3月に趣旨にかなう子どもさんにお渡しすることを目的にしています。あくまでも賛同いただける職員の献金で、永く続けていきたいものです。

註　児童養護施設は、両親をなくしたり、親が多様な問題や虐待、遺棄などで児童相談所の判断で社会に出るまで、栄光園の職員が親代わりになって養育する社会福祉施設です。

チャプレン通信

通信「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし必要なことはただ一つだけである」新約聖書マルコ10：41-42

以前、使っていたパソコンを廃棄するため中に入れていたデータを必要なものだけ残して他は全てを消す作業をしました。沢山のものがパソコンに入っていましたが、本当に大切だと思われるものを残して他は処分しました。その際、私達は自分にとって本当に大切なものが一体どの位あるのだろうかと思わさせられました。

沢山のものや情報に囲まれていますが、最後まで残しておきたいもの、かけがえのないもの、本当に価値のあるものはそう多くはないと思います。

時には本当に大切なものは何であろうかと見つめることは意味のあることだと思っています。皆さんにとって本当に大切なものは何でしょうか。

カウンセラー室
堤　健生

いずみ会より

いずみ会とは、いずみの園の職員で構成され、職員相互の親睦を深めるために結成されている会です。

2011年度新役員
会長　松井 学

東 久美　前田 裕司　筒井 知美　小松 告代
藤原 和子　岩尾 文子　和間 亜紀　島元 春樹

今回、2011年度のいずみ会会長に就任させて頂きました、かきぜグループホームいちょうで主任をしている松井学です。いずみの園に入職し、今年で8年目になります。いずみ会役員という大役に私達が選ばれたことを誇りに思い、今年1年いずみの園全職員の希望に添える様に、また悔いの無いよう、役員全員でサポートしていきます。

会長　松井 学

いずみ会 旅行記

訪問介護課　中島 喬生

今回初めていずみ会の慰安旅行に参加し、鹿児島へ行ってきました。

初の慰安旅行ということもあり、緊張するかと思っていましたが、とても楽しいメンバーで初参加の自分を気遣って頂き、3日間楽しく過ごすことができました。

桜島では自然の雄大さを、知覧特攻平和会館では当時の方々のいろんな思いを知ることが出来ました。

自分は初めての鹿児島旅行でしたので、何を見ても新鮮でした。何より普段なかなか接することがない他の部署の先輩職員と話ができ、親睦が深められ、いずみの園っていいなと感じました。

シリーズ第1回

『ワークライフバランス』を知っていますか？

■日本におけるワークライフバランス（以下、「WLB」といいます。）の定義は…。

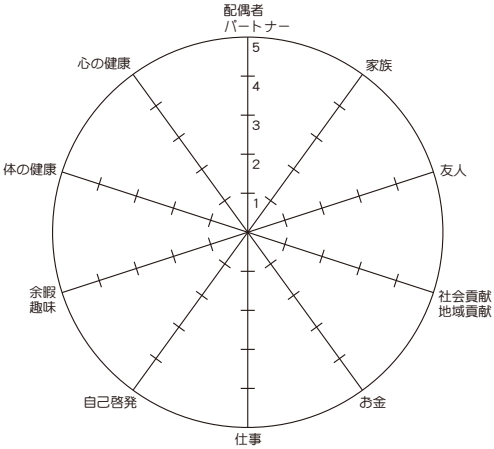
―働く人が仕事上の責任を果たそうとすると、仕事以外の生活でやりたいことや、やらなければいけないことに取り組めなくなるのではなく、両者を実現できる状態のこと（厚生労働省：男性が育児参加できるワークライフバランス推進協議会、2006年）―

■あなたのバランスはとれていますか…。

あなたは今の仕事と生活のバランスに満足していますか。やりたいのに時間がなくて出来ていないことはありませんか。

まず、今の自分の状態を知るため、WLBダイアグラムを書いてみて下さい。それぞれの分野で自分の満足のいく状態とはどんな状態か考えてみて下さい。人生のなかで環境やライフスタイル、価値観の変化などによっても、自分にとってのバランスは変化していきます。「今」それぞれの項目がどのレベルにあるのか自己診断してみることからはじめてみてはどうでしょう。

WLBダイアグラム



〈記入の仕方〉
・目盛りは5段階です。
・それぞれの項目ごとに、自分のなかでバランスがとれている状態（満ち足りている・満足している状態）を5として、現在どのレベルにあるか、あてはまる数値に「・」を書き入れます。他人と比べる必要はありません。主観で結構です。
・そして、それ5を線で結びます。
・全体を見てバランスがとれていないところはどこでしょうか？ なぜバランスがとれていないと感じるのでしょうか。

※『ミネルヴァ書房 ワークライフバランス入門』より抜粋

編集後記

4月1日組織改正があり、経営企画室が発足し、この「いずみの園だより」の編集を見守ることになりました。

4月になり、遅い春でしたが中津市永添の森に巣立った大分県の県鳥である《めじろ》の眼を通して、いずみの園の屋根にたつ十字架に憩い、読者の皆さんにいずみの園の出来事をお知らせし、これからのいずみの園の進む途を見つめていければと思っています。よろしくお願いします。

メジロの眼

新広報委員会
戸川 正洋
白木原 和代
加木 千代子
志摩 茜
岩尾 文子
末延 政光

お問い合わせ・ご相談は

信望愛 Since 1978
いずみの園だより

日中一時支援事業所マルコ開設

いずみの園かきぜサポートセンターでは、2011年4月より日中一時支援事業所「マルコ」が開所しました。日中一時支援事業とは、障がいを持った方への活動の場を提供することにより、家族の就労支援や介護負担の軽減を図る事を目的に行う事業で、中津市の委託事業になります。いずみの園では初めて実施する日中一時支援事業ですが、保育士や介護福祉士、発達障がいに関する相談業務を行っていた職員などを配置しております。いずみの園が福祉施設として行ってきた32年の経験と介護保険デイサービスや児童クラブを併設していることにより、年齢や障がいを越えて交流を行い、ご利用される方、ご家族が安心して過ごしてゆけるよう援助をさせて頂きます。

ご相談、ご見学、ご利用希望のある方はお気軽にご連絡、お立ち寄りください。

（☎ 0979-26-0039）

新事業のスタッフです

主たる対象者：障がい児（者）概ね宇佐支援学校中津校に通う児童、生徒

定員：5名

ご利用日及び時間：

①通常利用実施期間：月曜日～金曜日（ただし、国民の休日、年末年始を除く）
　サービス提供時間 12:00～18:00

②長期休暇期間：月曜日～金曜日（ただし、国民の休日、盆休業期間を除く）
　サービス提供時間　8:30～18:00

③事務受付時間：利用日の8:30～17:30

費用：日中一時支援事業基準額、利用者負担の上限月額により決定します。

東日本大震災への支援活動

いずみの園では西畑修司氏の協力のもと、被災地へ支援物資を送りました。

施設内に備蓄していた食料や水、紙オムツに加え、購入したお米や生活用品などを、西畑さんのほか山崎さん、松尾さんの3名がノンストップでトラックを運転し、3月20日早朝には現地へ届けられました。

また、その後現地での物資運搬のボランティアにも参加されたそうです。

いずみの園での積込み

西畑建設専務
西畑修司 様

3月11日午後3時東京の娘より「大地震電話通じない」とのメールがあり、すぐさまテレビをつけると、目を疑う様な大津波が各地を襲うシーンが延々と続いていた。3月14日夜、今行かなければ！と決意して準備を始めたが、すでに物資の調達も困難になり始めていた。困っていたところ、同じ思いをしていた、いずみの園 冨永施設長が物資はあると協力してくれ19日昼に出発する事が出来た。現地では想像を絶する光景が広がっていた。避難所への道はかろうじて開けられていていたが，片側には家、車等すべてが瓦礫となり山のように積上がり、片側の川野底には人の乗ったままと思われる車が無数に沈んでいる…そんな光景が宮城県の海岸線（約100㎞以上）にずっと続いていた。内陸部でも電気・ガス・水道物流すべてが止まり、多数の人々を収容する福祉施設や病院、一般家庭までが二次被災者となっていた。まさに戦後最大の日本の危機だと思う。緊急救援の時は過ぎたが、これから長期に渡る援助が必要だ。少しづつ、長く援助していこう。最後に全国から集まった多数のボランティアが各避難所で活躍し、被災者は礼儀正しく整然と物資を降ろし「遠いのに有難う」と声をかけてくれ、道行く人々も大分ナンバーを見ると頭を下げてくれる。本当に日本人とは素晴らしいと思う。きっと世界中の見本となる様な素晴らしい復興が出来る事だろう。

被災地状況

荷降ろし

●編集・発行 社会福祉法人 九州キリスト教社会福祉事業団 介護保険総合ケアセンター いずみの園 〒871-0162 大分県中津市耶馬渓274A TEL 0979-23-1616 (代)
http://www.izumisonoen.jp E-mail sogocare@deluxe.ocn.ne.jp